

# आयूस: あーゆす

〈発行〉京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槇島町千足80

## ❖❖❖❖ わが青春に深く刻印されたもの ❖❖❖❖

幼児教育専攻主任教授・前図書館長 照屋敏勝

私の読書体験の中で私の精神に深く刻印された書物が3冊ある。1冊は中学3年のときに読んだWilliam Shakespeare (1564~1616) の『オセロ』である。はじめて読んだ本格的な物語であった。圧倒的で感動的であった。Shakespeareの作品とはこういうものなのかと思った。

2冊は高校3年の時に読んだ小倉豊文(広島文理科大学教授)著の『広島原子爆弾の手記・絶後の記録』(1948年)である。詩人・彫刻家の高村光太郎も3回も読み直したという本である。この本は兄がどこからか借りてきたものであった。家の仏壇に別の本と一緒に2冊おいてあったので、読んでみたのである。大変衝撃的な内容であった。戦争と原爆に対する認識を根底からくつがえすものであった。この本は最初『亡き妻への手紙—広島原子爆弾の手記』の予定であったように、原爆で亡くなられた奥様への手紙の形式で原爆投下直後の惨状が詳しく報告されている。アメリカ軍の原爆投下による広島・長崎での大量虐殺はナチスドイツのユダヤ人大虐殺、日本軍による中国での南京大虐殺とともに「人類の三大虐殺」と言われている。広島原爆資料館によると、原爆が投下された1945年12月までに14万余の方が亡くなり、現在までに221,893人の犠牲者が慰霊碑に祀られているということである。

3冊は大学2年のときに読んだ『医師ベチュ

ン』である。現在は、岩波現代選書の中に『医師ベチューンの一生』(Roderick Stewart、阪谷芳直訳、1978)があるが、私が読んだのは別の本であった。私はその本を東京・千駄ヶ谷の小さな図書館で発見して、読み、そして感動した。ノーマン・ベチューン(1890~1939)はカナダ、アメリカ、イギリス、スペイン、中華人民共和国などで活躍したカナダの世界的な外科医である。カナダ政府は1972年にベチューンを公式に「国家的・歴史的に重要なカナダ人」に指定した。1976年にはベチューンの生家が誕生当時の状態に復元されて、「ベチューン記念館」が開館された。1930年代にはカナダ国立映画局によって伝記映画『ベチューン』も製作されている。

ベチューンは晩年の2年間は中国の八路軍(のちの人民解放軍)の中で献身的な医療活動を行った。「彼は……無私で、寛容で、明晰な人物であり、その職務に対する献身は無類であった」と評されている。毛沢東は彼の死に際して「ノーマン・ベチューンを記念する」という重要な文章を書いている。石家荘市には「ノーマン・ベチューン国際和平病院」も建てられ、そこに彼の大きな銅像も立っている。

ベチューンの人間愛と自己の職業に徹した生き方は多くの示唆を与えている。



## ＊ 私の推薦図書 ＊

文化庁長官  
京都文教学園学術顧問  
京都大学名誉教授 河合隼雄

- 中村雄二郎『哲学の現在』岩波新書
- 山口昌男『文化と両義性』岩波現代文庫
- イリーナ・コルシュノワ『だれが君をころしたのか』岩波書店
- N・クォールズ・コルベット『聖娼』日本評論社
- 鎌幹八郎『夢分析入門』創元社
- 河合隼雄『物語を生きる』小学館

または『未来への記憶』－自伝の試み－（上・下）岩波新書

※河合隼雄先生に先生ご自身のご著書を一冊含めて推薦図書をお願い致しました。

先生から上記の図書を推薦していただきました。

ありがとうございました。

心より御礼申し上げます。合掌。（照屋 敏勝）

先生

まど・みちお

入口の戸があいた  
ずっと休んでいた先生だ  
顔から からだから  
嬉しさが にじみでている

―先生！

先生！

赤ちゃん 生まれたんでしょ！

男だったの！

金太郎さんみたいなの！

わははは おめでどう！

もみくちゃんに されながら

ありがとう ありがとうといいな

教だんに おしあげられて

みんなを みおろして

先生は もう一ど

―ありがとう… といった

におうような おかあさんの声だった  
天から日がさしてきたような声だった

## 『蜘蛛の糸』を読んで

幼児教育専攻2回生 浦 紘子

韃陀多は数々の罪を犯し、地獄へ落ちた。文字通り“救いようのない”男である。実際、この男は、地獄に落ちても全く反省などしていなかったと見える。だが、そんな韃陀多も、たった一度ではあるが、善い行いをした。人を殺し、放火をし、悪事の限りを尽してきた男がである。一度は踏み潰そうとした蜘蛛を助けてやったのだ。

なぜ彼は、一匹の蜘蛛に哀れみを覚えたのか。人には、おそらく誰しも——例えどんな極悪非道な人間でも——心に光が差し込む様に、絶対に悪事を働くことができない瞬間があるのだと思う。また、どんな人間も『善』の性質を持ち合わせている。そうだと私は信じている。

彼は、それ相応の報いを与えられる。「自業自得」という言葉がある。自分の行いは良いことにしろ、悪いことにしろ、いつか自分に返ってくる。罰を受けるも慈悲を受けるも本人次第だ。

お釈迦様が彼に与えたのは、細い蜘蛛の糸であった。しかしせっかくの救いにもかかわらず、その糸を伝い韃陀多と同じく上へ行こうとする罪人たちに糸から下りると叫んだとたんに糸はブツリと切れてしまう。そして、彼は地獄の底へと落ちてゆく。それはお釈迦様の力によるものではなく、韃陀多の心に渦巻く利己的な考えと無慈悲な言葉によって、引き起こされたことなのだ。韃陀多が自ら招いた結果なのである。

糸に罪人達が群がっているのを見た韃陀多の心には、慈悲よりも利己心がより多く生まれていたのである。

彼に限らず利己的な面もまた、たいていの人間に潜んでいるもののように思われる。それは人をよい方向には導いてはくれない。むしろ悲しい事実を引き起こすだけである。そんな生き方では、いつか身を滅ぼしてしまうと思う。自分の行為の報いは、自分で受け止めなくてはならないのだから。地獄に落ちた時点で韃陀多は気付くべきではなかっただろうか。

地獄から抜け出せるかもしれないという頼みの糸を逃すものか、他の誰にもやるものかという考えが極楽へと続く道を断ってしまったのである。そう、韃陀多は、他の人間を全て目的を成し遂げるために邪魔であるとみなした。人を蹴落とそうとして、自分一人だけ助かろうとした。それが間違いなのである。

「幸福」は他人と共有してこそ、本物の幸福ではなからうか。人を見捨てて、傷つけ、そして手に入れたものなど、そうやって見出した幸福など、何の価値があると言うのだろうか。誰かを“不幸”という場所に置き去りにして、自分だけが幸福を得ようというような浅ましきでは、未来永劫、彼は地獄で悶え苦しむことになるだろうと思う。

地獄と極楽との間は、何万里という距離なのだ。そこをたった独りで上がってゆくのならばやはり、絶え難い孤独感も襲うだろう。しかし、そんな時に、人に救いの手を差しのべることで、自らも救われることもあるのだ。しかし、彼はそのことに全く気付かずいた。彼の人生は慈悲や助け合いというものとは無縁だった。

蜘蛛の糸がたどり着くところは、単なる地獄のはてに止まらず、ひいては極楽へと約束された正しく真つ当な人間の道であっただろう。そして糸は、上る人——救われる人間——が多い程太く強固になり、韃陀多を極楽へと確実に連れて行ってくれたであろう。彼もそこで善良な人間になり得たのに……。せめて、地獄の底へ落ちてゆく韃陀多がそれに気づき、悔いていたことを願う。

著者は、私達に示してくれている。人間の持つ利己心というものの恐ろしさを。そして報いは必ず戻って来ると。しかし、これは逆にも解釈することができる。幸福をつかむためには、良いことをせよ、良いことをすれば、それは自分に返ってくるのだと。

芥川龍之介著 『蜘蛛の糸 杜子春』 新潮文庫